

眼鏡な後輩の女の子は
好きですか？

Hな

イメージボイス付き♪ Re

基本**7枚**

文字あり・なし
本編未使用44枚

計**238枚**

会社の可愛い後輩
～今は俺の奥さんです～

入社初日

「みなさん。少し手を休めてこちらを見て下さい。
新入社員を紹介します」

上司の声が聞こえて、俺は仕事の手を止めた。
そういえば、四月から一人新卒を採ったと上司から聞いていた。

中途の俺と違って、そこそこのいい大学を出たエリートらしい。
女性らしいが、どんな容姿だろうか。
偏見かもしれないが、女で頭がいいってのは容姿にあまり期待できない。
勉強ばかりしてきたタイプで眼鏡。下にボサボサのポニーテールを
結ったような、絵に描いた地味子をイメージしてしまう。





「入江崎さん、入ってきて下さい」

ドアが開いて、若い女性が出てきた。

男性ばかりの職場で、少し場がどよめく。

眼鏡で勉強ばかりしてそうっつてのは合っていたが、

眼鏡の下に凛とした表情、入ってきた瞬間に感じた甘い女性のいい匂い。

服の下は…巨乳だ。黒いスーツに包まれていて分かりづらいが、

あれは隠れ巨乳というものだ。

「…いや、」かそれ以上あるかもしれない。俺はビビッと来てしまった。

この運命に…！


「入江崎さん。みなさんにご挨拶して」

「本日からお世話になります。入江崎聖憐（いりえさき、せれん）と申します。

どうぞ宜しくお願い致します」

「席は先月退社した佐藤くんの席が空いているから、

そこを使って下さい」



「はい」

聖憐さんが軽く返事をして、俺の隣の席に座った。


「苗字のせいもあって、名前シャレてるね」

俺は会話のきっかけを作りたくて、自分から話かけた。

「名前…変わってますよね。自分で言うのは恥ずかしいので、

私はもっと普通の名前が良かったんですけど…」

DONネームとまでは言わないが、く子のような名前の方が似合う容姿。
自分から名乗るのに恥ずかしさがあるようだ。



彼女がこの職場に来てから数日が経った。
可愛い顔に似合わず（実際、俺だけがこの子はかわいいと気づいている）、
今日も仕事をテキパキとこなしている。

「あの…」

ふうと、彼女がパソコンを打ち終えた瞬間に俺は声を掛けた。

「良かったらご飯食べに行かない？」

「えっ、あの…」

男性に誘われ慣れていないのか、恥ずかしがって困っている様子だ。
聞くと、幼稚園からエスカレーター式の女子大卒らしい。

ぐー

彼女のお腹が鳴る。

「OKって事で」

「あっ、はい」

彼女は頬を赤らめながら了承してくれた。

こんなやり取りをしながら一ヶ月ほど過ぎたある日。
俺は彼女を屋上に呼んだ。勿論、告白する為だ。





「初めて見た時から好きでした。付き合ってください」
「はい」

結果はOKだった。

この日の為に仕事を手伝ったり、ご飯を奢ったり、なるべく身なりに気を使ったり、出来る限りの事はしてきた。

この日、俺は彼女と初めてキスをした。

数日後



カタカタカタカタ……

仕事が終わらねー……！！！！
俺は頭を抱えていた。

「手伝いましょうか？」

早めに仕事を終わらせた聖憐が声を掛けてきた。

「おお、天使よ」

今日は放課後デートの約束をしていたのだ。素直に甘える事にした。

カタカタカタ……ターン！

終わった！みんなが帰ってから「時間ほど後の事だった。

…聖憐がいなかったらと思うとゾットする（倍以上は時間がかかるだろう）。





HOTEL PIA

会社から出て少し一緒に歩く。
本当は喫茶店で待ち合わせようと思っていたのだが、
みんな帰ってしまったので、
見られる事も無いだろうと一緒に会社を出た。



「あの、ここって…」

聖憐が頬を赤らめて言った。視線もキョロキョロと動いている。
そう、裏路地のラブホ街だ。

女性経験がほとんど無いので、ラブホは一度、女慣れした男友達と
宿代わりに入った事しか無かった（悲しい）。
なので、スマートに澄ましているが、俺も少し緊張している。

無人の受付を済ませ、部屋に入る。
初めてを貰うつもりで、一番グレードの高い部屋を選んだ。
前に男友達と泊まった部屋とは違い、部屋もベッドも綺麗で広い。



彼女が俺に笑顔を向ける。
「少し、休みましょうか」



聖憐がベッドに腰かける。

俺も隣に腰かけた。

そのままいいムードになって、俺からキスをした。

